

第15回 夏期福音特別集会（鹿沢）（3）

「神の奥義」

——エペソ書第3章——

1968年8月24日（鹿沢）

小池辰雄

神の奥義の取り計らい キリストの愛の如何許なるか 幕屋的構造 愛の表れ方は千変万化
我も汝を罪せず 羔羊の婚姻 聖霊の宿り 新天新地 圧倒的な願い

【エペソ3】

1 この故に汝ら異邦人のためにキリスト・イエスの囚人^{めしうど}となれる我パウロ
——2 汝等のために我に賜いたる神の恩恵^{めぐみ}の経綸^{けいりん}は汝ら聞きしならん、3 即ち
我まえに簡単に書きおくりし如く、この奥義は黙示にて我に示されたり。4 汝
等これを読みてキリストの奥義にかかわる我が悟を知ることを得べし。5 こ
の奥義は、いま御霊によりて聖使徒と聖預言者とに顕されし如くに、前代に
は人の子らに示されざりき。6 即ち異邦人が福音によりキリスト・イエスに
在りて共に世嗣^{よつぎ}となり、共に一体となり、共に約束に与かる者となる事なり。
7 我はその福音の役者^{えきしや}とせらる。これ神の能力^{ちから}の活動^{はたらき}に随いて我に賜う恵^{たまもの}
の賜物によるなり。8 我は凡ての聖徒のうちの最小^いき者よりも小き者なるに、
キリストの測るべからざる富を異邦人に伝え、9 また万物を造り給いし神の
うちに、世々隠れたる奥義の経綸の如何なるもの乎^かをあらわす恩恵を賜わり
たり。10 いま教会によりて神の豊かなる知慧を、天の処にある政治^{まつりごと}と權威と
に知らしめん為なり。11 これは永遠より我らの主キリスト・イエスの中に、
神の定め給いし御旨^{みむね}によるなり。12 我らは彼に在りて彼を信ずる信仰により、
臆^{おく}せず疑わずして神に近づくことを得るなり。13 されば汝らに請う、わが汝
等のために受くる患難^{なやみ}に就きて落胆^{きおち}すな、是なんじらの誉^{ほまれ}なり。

14 15 この故に我は天と地とに在る諸族の名の起こるところの父に跪^{ひざまづ}きて
願う。16 父その栄光の富にしたがいて、御霊^{みたま}により力をもて汝らの内なる人
を強くし、17 信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ、汝らをして愛に
根ざし、愛を基^{もと}とし、18 凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・
深さの如何許^{いかばかり}なるかを悟り、19 その測り知る可^べからざる愛を知ることを得し
め、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給わん事を。

20 願わくは我らの中にはたらく能力^{ちから}に随^{したが}いて、我らの凡て求むる所、すべ



て思う所よりも甚く勝る事をなし得る者に、²¹ 栄光世々限りなく教会によりて、又キリスト・イエスによりて在らんことを、アアメン。

【エペソ5】

.....

³² この奥義は大なり、わが言う所はキリストと教会とを指せるなり。.....

神の奥義の取り計らい

この故に汝ら異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となれる我パウロ——
といて、また改めて言いなおしている。

² 汝等のために我に賜いたる神の恩恵の経綸は

この「恩恵の経綸」という表現がここにちよいちよい出てきますが、

汝ら聞きしならん、³ 即ち我まえに簡単に書きおくりし如く、この奥義は黙示にて我に示されたり。⁴ 汝等これを読みてキリストの奥義にかかわる我が悟を知ることを得べし。

この「奥義」という言葉がたくさん今度は出てくる。

⁵ この奥義は、いま御霊によりて聖使徒と聖預言者と共に顕されし如くに、前代には人の子らに示されざりき。⁶ 即ち異邦人が福音によりキリスト・イエスに在りて共に世嗣となり、共に一体となり、

ここが奥義の一つなんです。ユダヤ人とギリシア人とが一つにされる。しかも、ユダヤ人は全部が改宗したわけでは決してない。今もあいかわらず、ユダヤ人はこの新約は認めないけれども、その一部のは確かにひっくり返った。

共に約束に与かる者となる事なり。

神の国の約束にあずかる者になった。

⁷ 我はその福音の役者とせらる。これ神の能力の活動に随いて

この「神の能力の活動」という言い方も前に出てきました。

我に賜う恵の賜物によるなり。⁸ 我は凡ての聖徒のうちの最小き者よりも小き者なるに、

「数えるに足らないところの者である」とパウロは言いました。というのは、キリストに逆らっていたものですからね。

キリストの測るべからざる富を異邦人に伝え、

ここにも「富」という字がでてくる。キリストの豊かなる無量の内容を異邦人に伝え、

⁹ また万物を造り給いし神のうちに、世々隠れたる奥義の経綸の

この「経綸」というのは「オイコノミア」という字ですが。神の奥義の「取り計らい」の如何なるものかを、



如何なるもの乎をあらわす恩恵を賜わりたり。¹⁰ いま教会によりて神の豊かなる知恵を、天の処にある政治と權威とに知らしめん為なり。¹¹ これは永遠より我らの主キリスト・イエスの中に、神の定め給いし御旨によるなり。¹² 我らは彼に在りて彼を信ずる信仰により、臆せず疑わずして神に近づくことを得るなり。¹³ されば汝らに請う、わが汝等のために受くる患難に就きて落胆すな、是なんじらの誉なり。

キリストの愛の如何許なるか

さあそれからです、私が今日話すところは。

¹⁴ ¹⁵ この故に我は天と地とに在る諸族の名の起るところの父に跪ずきて願う。¹⁶ 父その栄光の富にしたがいて、

パウロの祈りです。「栄光の富」。無限の豊かな栄光のままに、

御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、

「御霊により力をもて」と。御霊によるところの力。それでもつて汝らの内なる人、汝らの一番根源的な人。「新たなる人」というのと、「内なる人」というのは同じことです。「新次元の人」です。この新次元の人を御霊の力によって強くしと。

「サタンのとりことなる」というようなことがある。なにかダメだ、どうもおもしろくない。その時に、いいですか、自分というものを意識してサタンと向かおうとしたらダメです、苦しくなるよ。そのまま、キリストの前にただそのまま自分を投げ出す。あとは自分の信仰でも力でもない。御霊の助けによって、

「主さまー！」

と叫ぶ。そこからして、呼ぶ者には必ず答えてくださる。

「汝らの心をいかなるときにも注ぎいだせ」

と。あるがままに自分を投げ出すことがこの「注ぎいだせ」です。

「御霊により力をもて汝らの新次元の人を強くし」

と言われていますので、何も恐れることはない。どのような苦しい事態も、苦しいままにそこにただ平伏することです。そうしたらば、必ずその助けがきます。

¹⁷ 信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ、

「信仰によりて」というのはもちろん、

「主さま、あなただけです」

ということ。自分の何かが信仰でも何でもない。あけつばなしの魂でもつて、

キリストを汝らの心に住まわせ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、¹⁸ 凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何許なるかを悟り、



まあ何という言葉かと思う。「愛の広さ・長さ・高さ・深さ」といって、何ごとかと思う。

19 その測り知る可からざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給わん事を。

これがパウロの切なる祈りです。

幕屋の構造

一体それでは、そのようなキリストの愛は何にかかってきたか。私は一回、二回で徹底的に「個」と言いました。今度はこの徹底的になる個は私がしょっちゅう言っているところの、幕屋の構造です。a b cという個。個はしかし決して孤ならず。本当の個は孤ならずという。真に

「神—キリスト—我」

となったこの個ならば、こういう個は決して孤では、孤独の孤ではありえない。必ずこの個は展開する個です。だから、このaという個はbに向かつて、bはaに向かつて、bはcに向かつて、cはbに向かい、またaとcは互いに向かう。このような交流が——交わりの流れ、「コイノニア」の流れです。また、こういう向流という字も今初めて使います——こういう互いに交わるところの、これがコイノニアです。そういう交わり、コイノニアの事態をドイツ語でいうと、「ゲマインデ、キルヒエ」、集会、教会、召団という。「召団」（エクレシア）とは召されたる団体、藤井先生が使ったいい言葉です。

神に呼ばれて、呼び出された者がまず個である。そして、これがコイノニアになる。最初の個は預言者と使徒たちですよ。けれども、私たちは何かの集会に入っていて——集会という集合名詞的な個だね、今度は——この集合名詞的な実体、これを「体」^{からだ}という。これはキリストの体です。キリストの体としての、有機体としての——これが我々の集会であろうと教会であろうと、カトリックであろうとプロテスタントであろうといい。建物ではない——霊的な、霊化されたところの人格体、霊的人格です。霊的人格の、切っても切れないところの、こういう有機体的な関係になっているもの。それがキリストの体です。

神・キリストの霊がここに立っている。キリストは私たちと同じ水平線に、平面の上に立ってくださっている。今は天界におられるけれども。この神・キリストが大黒柱になっているところの幕屋的（三角垂体）構造。これが旧約から新約に至るまで幕屋という大事な実存体がありますが、これを新約聖書では「教会」という言葉でいわれているわけです。

そういうところの中に入ってきて、ここでもって救われる。即ち、救いの基^{もと}はこういったひとつの群れです。群れの中に入ってきては救われるというのが、今の救いの現実です。ただ本を読んで、救いの世界にはなかなか入れない。もちろん、特殊な人はそれができます。けれども、今の神の召しというものは、召団、幕屋的な多の中——体的な多であって、雑多の多ではない——そこが、キリストの愛の対象となっているものは、その一つひとつの



個であると同時にその全体である。

愛の表れ方は千変万化

迷える一匹の羊をも、九十九匹をそっちのけにして、谷底まで探しに行くということは、一つをも欠けることができないという。一つも欠けることのできない全というものに、キリストの愛はかかっている。キリストの愛は即ち、そういった我々の——これが究極の意味においては人類になります。ただ人類といったってそれは観念になっってしまうけれども——本願の究極のところは人類全体の救済、万人救済にいくけれども。万人救済をただ万人と観念で言っているのではなくて、具体的なそういった集まりの存在——方々にある——に顧みがくる。

その全体がまたキリストの大きなエクレシアである。私に言わせると、そのひとつびとつの集会というものが、どこの教会であろうとも、それが「聖霊の幕屋」であり、今度は全体としては「キリストの幕屋」であり、それがやがてキリストの日がくると、それは「神の幕屋」ということになる。これは黙示録でいわれているところの「神の幕屋」ということになる。それが「エクレシア」、一般には「教会」といわれていることです。

それがキリストの愛の対象なんです。私たちはキリストにそのようにして愛されているが、しかしそれはただ十把一絡げひとからげではない。その一として私たちをつかんでらっしゃるその愛はまた、我々一人ひとりの個として深くそれぞれの存在において——甲に対するキリストの愛と、乙に対するキリストの愛はちがうですよ、内容的には——不公平なちがい方ではない。我々一人ひとりが絶対なる特殊性を持ったものである。特殊性を持った者に対する顧みというものは、みなそれぞれの内容を持って、甲に対してキリストは怒ることがあるときには愛である。乙に対して赦すことが、あるときには愛である。いろいろな表れ方をして、その個に対して愛が表れている。だから、

「その愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何いかばかり許ゆるするか」

という、量りしれないところの愛の内容。私たち一人ひとりの毎日の生活においても、神の、キリストの愛の表れ方は千変万化であります。愛というひとつの言葉は決して、内容がひとつではない。その表れ方は、

「どうしてこんなことをなさるのだろうか。これが神の愛だろうか」と思われることもある。

塚本先生は、自分の奥さんが震災で家がつぶれて梁の下でたおれてしまった。その時に、「神は愛なり」と響いたという。藤井先生は、奥さんをとられたときに、「神の義がわかった」という。義というものが、愛というものが、その内容は一番深いところでは一つなんです。その受け方がどうであっても、そのときの本ものの愛だと。藤井先生というのは、どちらかというと、非常に義の強いひとですから、神の義ととる。もちろん、先生の中に深い愛があつ



た。人間的にいうと、塚本先生は溶けたような愛のひとつですけれども。藤井先生の方はおつかないですよ、正直。けれども、また言わないところの別な味は持つておられますけれども。とにかく、キリストの愛は、どれほどその個と、その個のひとつの有機体的な体としての——幕屋と言おうが、エクレシアと言おうが、教会と言おうがいいです——それに対して、

「キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さのいかにかりなるか」ということ。私たちはいつも個に対して、また、家庭というひとつの有機体、人格体というもの——一なるところの在り方——それに対するところのキリストの愛を受けとる。

我も汝を罪せず

家庭のことについては、イスラエルの神は夫であり、イスラエルの民は妻であるということ、祝福された家庭において示されたかと思つたら、どっこい、旧約においてはホセヤという惨憺たる家庭において示された。私はホセヤ書を読むと涙が流れる。ホセヤは不貞なる妻を娶らされてしまつて惨憺たるものです。まあホセヤ書を読んでごらん下さい。

「だけれども、お前は帰つてこいよ。私もお前にそのようにするから」

と。即ち、惨憺たる妻の現実を、「お前は悪かつたじゃないか」ととがめない。

「お前は、あの姦淫の妻をめとれ。もう一辺取り返せ」

と、神さまに言われた。

「ちやうど、あのようイスラエルは私から背いてしまつてゐる。だから、あれを取り返せ」

と。それでやつと取り返した。

「お前はこうだったが、まあこれからはちゃんとしていなさい。私もそうするから」

と。「私もそうするから」と言つたつて、かつてホセヤは別な女とどうのこうのなんていうことではなかった。けれども、「私もそうするから」と言つて、この妻と同じ次元にこのホセヤは立ちました。

「我もまた汝に対して」

というこの言葉はヨハネ伝7章の終りから8章のところに出ている、あの姦淫の女が捕まえられてしまつて、「さあこれを石で打ち殺してよかろうか」と問われたときに、キリストは、

「お前たちの中で石を打てるものは打つてみる」

と言つたら、みんな逃げて行つてしまつた。そして、

「我も汝を罪せず」

とキリストは言われた。キリストは「我も汝を罪せず」と言つて、どん底に立つて、これを贖いとつた。キリストは私たちの罪を罪として贖いとる。キリストは罪びとの首となつた。^{かしら}私たちのいかなる事態に対しても、キリストはひとつも例外となさらない。全部それを彼



は背負った。それが十字架ということ。このキリストの愛というのは、そういった贖いの、徹底的などん底に立ったところの、

「その広さ、長さ、高さ、深さのいかにばかりなるか」

という、万人に向かって例外なくなさっていくところの愛です。

羔の婚姻

このキリスト教の歴史をみて、いかなる教会も完全無欠な教会はない。我々の幕屋といえども、どここの集会といえども、みな疵きずものであります。その疵ものに對するところのキリストの愛は、このホセヤが示されたところの、このホセヤの現実が実は本当の現実の代表である。非常に祝福されたる家庭もあります。また、惨憺たるものもあります。いろいろなことがあります。しかし、どのような事態であつても、それが人間の事態であるかぎり、みな完全なるものはひとつもない。

具体的にいいますと、結婚をしない人もある。できない人もある。また、いろいろな場合があります。人間の道というものは、その人にどうしても背負わされるところの、実存的な道というものは決してみな同じではない。我々が歩ませられるのは路であつて、その路がどんなに行き詰まつた路であつても、それがのびきならないところの、その人にとつてどうしても歩かなければならない路であるならば、それは天の道に通じている路です。その路はいろんな路がある。その路がみんな同じものであるということはありえない。そういう意味において、藤井先生は「結婚観」と仰つたけれども、私は「結婚道」といいたい。結婚道というものは、天地を貫いた結婚道というものは、パウロもこのことは実は悲願としていたと思う。けれども、パウロはローマ書の中では現実の人間の弱さをみて、それから今は終末に突入している時であるということを見て、あのような言い方をしています。今そのことを詳しく論ずることはいたしませんけれども。

本当の神さまの

「神——キリスト——我」

という——またその「我」がそういった有機的な家庭的な有機体であろうとも、あるいは兄弟としてであろうとも、あるいはそういった集会としてであろうとも——とにかく、人間は真の個ならば、そういう個ではない、あるひとつの体的なものである。その体がどのような体をもつて現されていくかということにいろいろありますけれども。

それを一番祝福された姿として、この夫婦という在り方、結婚という在り方において聖書は示して、そして、「羔の婚姻こひつし」という、人間の世界で一番祝福された在り方の表れとして、羔の婚姻というものを黙示録においてヨハネが示されてある。このことをつかまえて、藤井先生は自分の体験から偉大な詩を書かれたわけです。



聖霊の宿り

そういうことで、今度是有機体的な私たちの問題になる。私たちは京都の集会、信州の石垣会、東京の武蔵野集会、熊谷の集会、いろいろある。これが一つにこうやって一緒に一年に一回このような大集会をする。これは本当にこのひとつびとつ

「神—キリスト—それぞれの集会」

というものが単なる「組織」ではない。

ブルナーが『教会の誤解』という本に非常によく書いてますが、これは本当に名著ですね。はつきりとブルナーが、

「聖霊の通っていない教会は、どんなに形が立派であっても、これは本当の教会ではない。ゲマインデというものは霊的な人格の共同体であって、いかなる組織でも建物でもない。そのことが実はキリスト教の歴史においてすり替えられて、本質がずいぶん見失われてしまっている」

と書いてありますが。パウロの原始キリスト教においても既にその欠陥がもう生じている。けれども、パウロが言っているところの教会はもちろん、この聖霊の宿った人たちの、切っても切れないところの、さつき私が言った「交流」（向流）に自然になるわけです。おのずから聖霊のあるところには交わりがある。交わりがないならば、これは聖霊のある世界ではない。本当にその交わりはキリストの愛の交わりである。一人の苦しみを苦しみとして、一人の喜びを喜びとしていくところの、

「傷める^{あし}韋^{あし}を折ることなく、ほの暗き^{ともしび}灯火を消すことなし」

という、深い思いやりの世界です。この「思いやり」という字は、孔子でいうところの「恕^{じよ}」ということ。

「孔子の教えの究極のところは恕^{じよ}なるかな」

なんていう言葉もあるくらいです。本当の思いやりは担いの精神です。本当の思いやりは担いである。担いは、聖霊がなければ担いできないんです。

この個が聖霊に貫かれれば、どうしても交流が始まって、そして、これが一つの群れとなる。有機体的な群れとなる。私たちが本当に——昨日から私は感じていますが——この三つ、四つの群れが一つの群れとなっているんです、正直。なんとこれは聖霊の実証ではないかと思っております。私たちは人間としては惨憺たるやつらですよ。けれども、その惨憺たるやつらが聖霊によつては変貌している。変貌して、その変貌の根源の現実、根源のあなた方一人びとりがどんなにダメな人たちでありましても、決してダメでないというのは、この「聖霊の宿り」ということがはつきり、皆さん一人びとりが言えるわけです。私みたいなやつがこうやって話がゆるされるのは、この御霊があるから許されている。御霊がなくて、ただ大学の教授とか何とかいって話なんかしたら、とんでもないまちがいです。



新天新地

それで、

19 その測り知る可^べからざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給わん事を。

20 願わくは我らの中にはたらく能力^{ちから}に随^{したが}いて、我らの凡て求むる所、すべて思う所よりも甚^{いた}く勝^{まさ}る事をなし得る者に、²¹ 栄光世々限りなく教会によりて、又キリスト・イエスによりて在らんことを、アアメン。

と、パウロのこの祈り。この祈りは今、私たちに直接に迫ってきている。パウロは私たちのためにこの祈りをもつて今迫ってきています。

それから、5章32節、

32 この奥義^{おおい}は大なり、

私が「神の奥義」といったのは、その二つの面があるわけですが、

わが言う所はキリストと教会とを指せるなり。

この群れ、召団、幕屋、集会——何といってもいいですよ——これがキリストの愛の対象となつてるところのもの。そして世界の救いは、家庭、大家族——日本人なら家族でいい——この大家族の、私たちはその意味において今度は、兄弟姉妹だよね。夫婦というのはとにかく地的な形態です。地的な形態がしかしただ地的ではないということをパウロは言っているけれども。しかし、兄弟という、また友人という、また先生と弟子という、いろんな関係がある。それぞれの関係がもつとも正しく有機体的に構成されて生きていくためには、どうしてもそこに聖霊がきてなければ、どの関係にしても本当に立たない。

その意味において、私たちはこの奥義が、キリストの愛がそのようにかかつていく。人間界のいろんな相対的な関係も結局それがあるひとつの絶対的な質をもつて天界に、天的なものになるためにはもう聖霊のほかにない。我々是我々自身をどんなに整えようとしたって整わない。本当の整いというものは、この御霊によつてはじめてそれがやがて疵なきものとされていく。個としてもまたエクレシアとしても、「栄光より栄光へついにキリストの姿に化する」ところのもの。それは神の幕屋となつて新天新地になる。

これは黙示録。私は最後に黙示録の講義をいつかしますけれども。これはとっておきだからやらない。藤井先生は黙示録の講義を始めてしまつて約一年、ちょうど30回やつて、6月29日に藤井先生の集会は7月から夏休みに入つて一応解散した。9月からまた申し込まなければいけない。もうこれで黙示録の最後、22章。藤井先生が私に最後に仰つた言葉は、

「小池君、ごころうさんだった」

と。何がご苦労さんだか知りませんが、それから2週間たつたら、先生は向こう側に逝ってしまった。黙示録の講義を終つて、まるで

「わがこと終れり」



みたいなんだ。

私はその講義を目を皿にして聞いていた。それからあとでもって、30日間毎晩かかって、私は先生の講義を書いた。あれは私の文章と先生の文章と半々くらいかもしれないけれども。あれが今、全集の第6巻に出てます。あのときは私は正直、聖霊につかれたようにして書いたね、毎晩。

「よくこれを30日で書き上げたな」

と思って、自分ながら驚いてしまった。そういう記念がある黙示録。黙示録は何といったって最高のところですよ。ヨハネ伝とヨハネ黙示録は新約聖書の最高のところですよ。

しかしながら、このパウロのエペソ、ピリピ、コロサイはまた別な角度で最高のところを示されている。私は正直、エペソ書を読みながら、もう他の註解書なんか読む気がしない。私はパウロに圧倒されて来たんだ。まず、私たちは御霊に感じなかったら、こんな文字は絶対に響いてこないですよ。

圧倒的な願い

「圧倒」ということで、ダンテの『神曲』の中の一句を引用しておきましょう。

「天国は熱き愛より、また神の意志を圧倒する活ける望みより強襲を受ける。」

これはマタイ伝11章12節の、

「激しく攻めるものが天国を奪う」

なんていう言葉があつたでしょ。それをダンテがここにもつてきた。

「人が人を征服するごとくにあらうで、天国は圧倒せられんことを願い、圧倒せられつつ、

おのが恵み、慈愛によって圧倒する。」

という、おもしろい言葉がある。即ち我々は天国に向かって、天的な現実に対してこれを何とかして突撃して天国を奪いとり、その中に本当に突入、突撃しようという、その我々の側の突撃、その圧倒的な願い。もの凄い圧倒的な願いを今度は逆に、それによって圧倒されようと、そのような願いを神さまは喜ぶ。キリストの祈りのところにもあります。

「お前たち、しつこく祈れ」

なんていうところもある。そうかとおもうと、

「簡単に祈れ」

と言ってみたり。波状的に祈れと。しかし、その力を逆に利用して、

「神さまは今度は恵みをもつてお前たちを圧倒するぞ」

と。私たちが本当に祈りの世界でもって、神の本願に圧倒されるときに、本願を本当に受けとるときに、私たちはこの聖霊の世界に本当に入っていく。

そういう意味において、ダンテのこの言葉がおもしろいから、ちょっとご紹介したわけです。では、これから祈りに入ります。

